

オラリオで安らぎを提供するのは間違っているだろうか

瀧栄 瑛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迷宮都市、オラリオ。

ダンジョンと呼ばれる地下空間の存在するこの都市は多くの人で常に賑わっている。

そんなオラリオの中心部から少し離れた場所にある一つの店。

昼は喫茶店、夜はバーとしてお客さんを招き入れる。

店の名前は『L a p a i x ・ t o i 』

その名の通り、1日の疲れを癒して「安らぎ」を提供していく。

目次

プロローグ	「開店前」	1
常連客くベル・クラネルく		3
鍛練とお誘い		7
常連客②くアイズ・ヴァレンシユタイン&レフイーヤ・ウイリデイス		10

プロローグ 「開店前」

午前6時、開店2時間前に目が覚める。何年も繰り返す同じ時間に起きてきたので目覚めはいい。

身支度手早く済ませて早速、開店の準備作業へ取り掛かる。とは言っても、昨日のうちに食材の仕込みなどの時間がかかるものはあらかじめかた終えているので、常連さんの来る時間に合わせて調理したり、今のうちにコーヒーの豆を挽いておくくらいだ。あとはバイトを待つだけだが……

「レイ君おはようー！」

「おはよう、ヘスティアさん。開店まであと三十分くらいだから準備してきてね。」

わかったー！と元気な返事をしたのはバイトのヘスティアさん、真正銘の神様だ。団員が1人だけという小さなファミリアの主神で、ファミリアのために進んでバイトをする家族思いの神様だ。性格がとても明るいのでウエイトレスとして働いてもらっているが、お客さんにはとても好評だ。

今、この店は店長である僕——レイ・ノルンとバイトのヘスティアさん、そしてもう一人、厨房担当として雇っているのだが、彼女は客足の増える昼頃からのシフトなのでまだ来ていない。特に繁盛しているというわけではないが、楽しくやれているので幸せだ。

「おまたせ〜。準備で何か手伝えることはないかい？」

どうやら着替え終わったようで、ヘスティアさんが出てくる。制服は白いブラウスに黒のリボン、黒のパンツと紺色のソムリエエプロンと、とてもシンプルなものだ。そのシンプルさが彼女の可愛い顔立ちを際立たせている。

ちなみに僕の方も白いワイシャツに黒のスラックス、紺色のノーマ

ルエプロンとこれまたシンプルなものとなっている。変にデザインを加えると費用もかかってしまうのでシンプルにした、というのが実際の所なのだが、思ったより好評でヘステイアさんも「爽やかな感じがいいね!」とのことだ。その後に「まあうちのベルくんならもつと似合うだろうけど!」と盛大に惚気られた。親バカなのだろう。聞いてて少し微笑ましく思ったのは内緒だ。

「いや、もう終わってるよ。いつも通り常連さんも来るだろうし、今日もよろしくね。」

そう言いながらヘステイアさんにコーヒーを渡す。これは開店前にいつもやっていることで、気持ち切り替えるスイッチのようなものだ。ヘステイアさんブラックが苦手なようで、砂糖とミルクを少し多めに入れたぐらいが丁度いいらしい。ちなみに僕はブラック。

ヘステイアさんはコーヒーの入ったカップを両手で受け取ると、少しずつ冷ましながら飲んでいく。その姿は小動物のようで可愛らしく、思わず頬が緩む。

「うん。やっぱりレイ君のコーヒーは落ち着くね。……よしっ!じゃあ今日もよろしくね、店長!」

「ありがとう、ヘステイアさん。それじゃあ開けてくるよ。」

午前8時、開店時間が来た。今日もお客さんの安らぎのために働いていこう。

「いらっしやいませ。ようこそ『La paix・toi』へ。」

常連客くベル・クラネルく

ベル君はウチのバイトのヘスティアさんが主神であるファミリアの唯一の団員だ。そのためにソロでダンジョンに潜っており、強くなるために、そして二つの目標のために日々頑張っている。

ここまでは純粹ない子のように思えるが、そのうちの一つの目標が少し変わっている。一つは

「英雄になりたい」

という少年らしいものなのだが、もう一つは

「可愛い女の子と出会ってハーレムを作る」

というもので、初めて聞いた時は思わず顔が引き攣ってしまった。ベル君はあまり男らしいとは言えない見た目な上に、実際に話してみると、「ハーレムを作る」なんて言っているのが不思議なくらい純粹で初心な子なので違和感がすごい。

ベル君はたまにヘスティアさんと一緒に店を手伝ってくれるのだが、以前接客をしてもらった時に女性客の一人に大変気に入られたようで、好意的に話しかけられると顔を真っ赤にしてそそくさと注文をとって逃げて来たくらいだ。ちなみに、ヘスティアさんはその様子を見て頬を膨らませていた。

ベル君のハーレム願望はどうやらおじいさんの影響によるものらしいが……そのおじいさんに色々と問い質したいものだ。

さて、そんなベル君はうちの常連客の一人でもある。冒険者という立場柄、来るのはほぼ夜のバーの時間なのだがその時には『スブラキ』という極東の「焼き鳥」という料理に似た料理と『グリーンクセラーズ』という白ワイン、『サガナキ』というチーズを油で焼いた料理をよく注文していく。故郷いた頃を思い出すようで、食べている時にはたまに思い出話をしてくれる。その時の表情が楽しそうで、弟がい

たらこんな感じなのだろうかと思いながら話を聞いている。

ある日のこと、ヘステイアさんがバイトのシフトをずらしたいと言ってきた。彼女がこんなことを言うのは初めてで、シフトのことは了承したが、何があったのか気になってしまい、昼の仕事にあまり集中出来なかった。まだ落ち着かないままバーの時間に向けて店の準備をしていると、店の扉が開く音とヘステイアさんとベル君の声が聞こえてきた。

「ヘステイアさん？それにベル君も？なにかあつ……ベル君!?その怪我は!？」

「あ、レイさん。ダンジョンでちよつと無茶しちゃいました」

「ちよつとなんてもんじゃないだろう!全くキミってやつは!」

「う……ごめんなさい、神様。」

「ベル君はとりあえず座つて。ヘステイアさんは一緒にいてあげて。今日はバイトはいいから。」

そう言つてヘステイアさんと、全身傷だらけになつて体を支えてもらっているベル君を座らせた。ベル君は相当疲れているようだが食欲はあるらしく、いつものメニューを注文してきた。その頃にはバーの開店時間になつてしまったため、ベル君達に閉店後も残つてほしいと伝えておいて店を開くことにした。

ベル君達をちよくちよく気にかけてながら閉店の時間まで働き、後片付けも済ませてベル君達のいる席に座る。

「とりあえず、何でベル君がそんなに怪我をしてるのか聞いても?」

「はい。実は——」

それから色々ベル君から聞いた。

ダンジョン5階層でミノタウロスに遭遇したこと

助けてくれたアイズ・ヴァレンシュタインに惚れたこと

直接ではないが、自分では釣り合わないと言われたこと
それが悔しくてそのままダンジョンに行つたこと
そして何より

——「強くなりたい」という純粋な想いを。

ベル君の目はとても真つ直ぐで、確かな強い意志見えた。だから
僕は

「ねえ、ベル君。僕に何か手伝えることはないかな？」

「え？」

「今の話を聞いて思ったんだよ、何か手伝いたいわって。別に頼まれた
訳じゃないし、もし必要ないならそれでも構わない。」

「でもレイさん、この店はどうするんですか？」

「そこは大丈夫。店に影響は出させないさ。」

「でも……そう言ってくれるのは嬉しいんですけど、手伝いつて何を
？」

「例えば……ベル君に戦い方を教えようと思ってる。これでも元レベ
ル4の冒険者だったんだし」

「ええっ!?!」

二人にすごく驚かれた。そんなに驚くようなことなのかな……

「本当ですか!?!……ッ!」

「落ち着いて、怪我に響くから。わざわざこんな嘘をつく理由はない
よ。ベル君つてナイフをつかつてるだろ? なら体術は絶対に必要に
なる。僕は体術メインでダンジョンに行つてたし、たまに小太刀も
使つてたから多少の違いはあるだろうけど教えられるはずだ。」

「そういうことでしたら是非お願いします!」

「僕からも頼むよ! 君になら安心してベル君を任せられる。」

そう言つて二人は頭を下げてきた。二人からはどれだけ本気なのかが伝わってきた。……なら僕は僕にできる限り最大のサポートをしよう。自ら提案したとは言え、ここまで真剣に頭を下げているんだ。二人が望みを叶えられるようにしつかりと鍛えてあげなきや失礼だ。

「じゃあ今日のところは家に泊まってきなよ。もう遅いし、

明日は定休日だからゆつくりしていつでも大丈夫だよ。」

「そこまでは流石に悪い……と言いたところだけどベル君も限界が近いみたいだし、お言葉に甘えることにするよ。ありがとう、レイ君。」

ヘステイアさんが言った通りのようで、気が緩んだのか、ベル君はだいぶ眠そうにしていた。

「ほら、ベル君。背中に乗つて。連れてくから。」

「……すみません。ありがとう、ごぎ、います……レイ、さ……」

ベル君は背負われるとすぐに眠ってしまった。本当に限界だったようだ。残らせてしまったことを申し訳なく思いつつ、明日はどうするか、稽古は明後日からにしようかなどと考えながら、ベル君を起さないように歩き出した。

鍛練とお誘い

—レイSide—

あれから2日後、ベル君の怪我也有程度治して休みも取らせたので、ベル君にトレーニングをつけるために僕達はオラリオの外壁の上に行った。

「さて、ベル君。早速だけど全力で戦ってくれ」

「へっ?」

「まずは現段階での君の実力が知りたい。詳しいトレーニング内容はそれから決める」

「そういうことでしたら……いきます!」

ナイフを抜いて突っ込んできたベル君の攻撃を避ける。攻撃を見切り、体裁きや重心移動に注視しながら適宜、反撃を加えていく。重心のブレは思っていたより少なく、ソロで潜っていただけあって実戦的な動きではあったが、甘いという評価を下さざるを得ない。

「振りが大きい。ナイフの利点を活かせてない」

「今のは回避できる!」

「視野を広く!多対一ですぐにやられるよ!」

そのままベル君の体力が尽きるまで戦い続けた。

—ベルSide—

「はあっ……はあっ……どう、ですか……?」

「うん、大体わかった」

すごいなあ……一回戦っただけでわかるなんて、元レベル4のすご

さがわかる。僕の攻撃は掠るイメージすらできないし、汗一つかいてない。僕も、こうなりたい。こうならなきゃいけない「じゃあ、次いつか」……え？まだ一分くらいしか経ってないんだけど……

「ん？どうしたの？」

「え、あ、もう少し、休んでも？」

「あく……うん、わかった……回復力が弱い？じゃあそこもかな……」

……過酷そうだなあ……

—レイSide—

早朝、ベル君の1回目の鍛練を終えて店へと帰ってきた。開店まで約30分なら、まあ間に合うだろう。

ちなみにヘステイアさんは

「ちよつとの間ベル君を頼むぜ！僕は行かなきゃいけないところがあるから〜！」

と、どこかへ行ってしまったので、バイトの子と2人でやらなくてはいけなくなってしまった。それをバイトの子——エリーゼ・フィーベルさんに伝えると

「ワタシは問題ないですけど、ヘステイアさん大丈夫ですか？最近になって急に休み始めて……」

「まあ、ヘステイアさんは今まで休まなかったし、それを考えたら少しぐらいはね？」

「ええ〜！それを言うならワタシも休んでないですよ！ワタシもちよつとくらい甘やかして下さい！」

彼女は店のたった1人の厨房担当だ。1人で全ての調理は大変というかだいぶキツイはずなのだが、完璧にこなしている。というのも、彼女には料理の才能があったようで、1週間程で全てのメニューのレシピを覚えて作れるようになり、その1週間後には1人も対応できるようになったのだ。

「う〜ん……まあ、うちの厨房担当ってエリーゼさんしかいないからどうしても頼りつきりになっちゃうし、かと言って雇うのもなあ……」

「雇おうと思えば普通にいけますよね？」

うん、まあそうなんだけどさ……

「なんと言うか、今のメンバーでやるのが自然な感じだよ。こうやって落ち着いてやっていくのが一番好き……かな。それに料理は僕も作れるし、2人で一緒にやるの楽しいしね」

「あ、あー……またそんなことさらつとなあ……」

「ん？そんなことって？」

「いえ、なんでもないです……ほら、仕事しましょう」

彼女に背中を軽く叩かれて、仕事に戻ることになった。いつも素直な彼女なのだが、たまにこうやってはぐらかすような言動をとる。何故かはよく理解してないのだが、たまにヘステイアさんがすぐくニヤニヤしてこつちを見てるので、その時はちよつと仕事の分量を増やしてる。

甘やかす、か……まあヘステイアさんも一応お休みってことになってるし、今年は丁度定休日だからいけるかな？

「エリーゼさん、よかったら怪物祭一緒に行きます？」

「……へっ!?でも、店!?いや、それより、一緒についてデデデートですか!？」

「店は定休日ですよ。まあ、デートになりますね。嫌だったら断ってくれても」

「行きます!!絶対に行きます!!むしろ行かせてください!!」

「喜んでくれたならよかった。詳しくは仕事が終わったら決めましょうか」

「はいー!」

こうして、僕はエリーゼさんとデートに行くことになった。

常連客②くアイズ・ヴァレンシユタイン&レフイーヤ・ウイリデイスく

—レフイーヤSide—

ロキファミアアの遠征が終わってからアイズさんの元気がない。テイオナさんとテイオネさんも気になっていたようで、アイズさんを部屋から引つ張り出して買い物に連れていくことになった。

まさかあんなに布面積の少ない店に連れていかれるとは思いませんでした……今思い出してもいくらなんでもあれはダメだと思います。でも、その後に行った店でアイズさんにとっても似合う服が見つかったので良かったです！少しずつですが元気が戻ってきたような気がします！

その後、テイオナさんとテイオネさんは用事を忘れていたらしく、お2人とは別れてアイズさんと2人つきりになってしまいました。まさかこうなるなんて思ってたので軽くパニック状態です。ホントにどうしましょう!?何か、どこかい所はなかったかな……あつ！1ヶ所良さそうながあつた！あそこなら……

「あのく、アイズさん?ここから少し行ったところにお気に入りの喫茶店があるんですけど、えっと、もしよろしかったら一緒に行きませんか?」

「…うん、いいよ。案内よろしくね?」

「っ!はい!行きましょう!その店、チーズケーキがすごく美味しいんですよ!」

そして私たちは目的地へ向かって歩き始めました。

—レイSide—

喫茶店の時間の営業時間もそろそろ終わりが近づいてきた頃、お客

さんがほとんどいなくなったので軽く店の清掃とバーの準備をしようとする、扉の開く音が聞こえてきた。

「こんにちは。店長さん、まだやってますか？」

「いらっしやい。まだやってますよ、レフィーヤさん……とアイズさんも一緒？初めてですね」

「はい。そうなんですよ……って、アイズさん『も』？それになんてそんなに親しげなんですか!？」

「アイズさんもうちの常連さんですよ」

「うん。ここには、よく来るよ。レフィーヤもよく来るんだ？」

「えええええ！店長さんなんで教えてくれなかつたんですか!？」

「なんでって、聞かれてませんしね。とりあえずお2人とも座ってください。あと、ご注文はいつものでよろしいですか？」

「はい。いつもの、お願いします」

そう言ってお2人とも席に着いた。レフィーヤさんが

「まさかアイズさんもよく来てたなんて……」

などとブツブツ言いながら座ったのを横目に、厨房へと注文を伝えるに行った。

お2人とももの『いつもの』というのは偶然にもチーズケーキとドリンクのセットだ。ただし、レフィーヤさんはスフレチーズケーキとカフェラテで、アイズさんは小豆チーズケーキと緑茶という極東風のセットだ。

実はお菓子の極東の食材をアレンジしたり組み合わせると意外と相性がある場合があり、アイズさんのものもその一つと言える。

料理が完成したので2人の座る席へと運ぶと、2人の会話が聞こえてきた。

「……ごめん、レフィーヤ。私が落ち込んでいたから、気を遣わせちゃって、それ気づけなくて、本当にごめん」

「違うんです。気を遣ってるんじゃないで、私はただ、アイズさんの力になれたらって、そう思ってる……」

「…途中から口を出すのもあんまり良くないですが、僕からアイズさんに一言」

「店長…さん？」

「アイズさん、こういう時は『ごめん』じゃないと思いますよ？」

「…はい。レフィーヤ、ありがとう」

それを聞いたレフィーヤさんは本当に嬉しそうに、少しだけ照れくさそうに微笑んだ。僕もつい頬が緩んでしまうのを自覚しながら、注文の品を出して下がった。少し経ってからふと2人の方を見ると、とても楽しそうに、自然に笑いながらチーズケーキを食べていた。